

子育て「奇跡のまち」は今

ひとりの女性が生涯に産む子どもの人数を推計した合計特殊出生率が2.95(2019年)と全国でも高く、「奇跡のまち」とその子育て支援策が注目されている岡山県奈義町(人口約5700人)。しかし、いま同町で積み上げてきた子育て応援施策が、人口維持の手段へと変えられようとしています。(岡山県・小田嶋美枝)

出生率2.95の岡山県奈義町



クローズアップ

町役場前の「子育て応援宣言」の看板を示す森藤町議



30年にわたって奈義町の子育て支援拡充に取り組んできたのが、日本共産党の森藤政憲町議です。町民の要求と運動が「子育てしやすいまちづくり」を前進させてきました。

奈義町は、岡山県の北部、鳥取県との県境にあります。30年前の同町の出生率は1.41。中学校の給食も幼稚園の放課後保育もない、県下でも子育て支援の大きき遅れた町のひとつでした。

当時、4歳から5歳までの全員が幼稚園に通う奈義町では、子どもが幼稚園に通うようになると多くの親が仕事を辞めなければならず、近隣の高校までの交通費月2万5千円は大きな負担となっていました。

三大課題を解消

森藤町議は①中学校給食の実現②高校生の通学費助成③幼稚園の放課後保育の実施—を子育ての三大課題と位置付け、毎議会で質

ホーム(地域で子どもを一時預かる施設)や「じごとえん」(子育てをしながら「ちょっとだけ」働く就業支援)が、検証もないままに出生率上昇の施策として取り上げられています。その一方で、公共スポーツ施設の職員増や高齢者福祉の拡充を求める声があっても、人口維持に直接関係しない施策には冷たい町政の姿も見えます。

町民の声聞いて

合計特殊出生率の高い奈義町ですが、新たに生まれる子どもは年間50人を超えず、大学進学を機に町を離れる若者も多く、人口維持政策は大きな困難を伴っています。

森藤町議は、テレビ報道などにみられる「3人子どもをつくるのが普通」という過度の強調は、子どもが少ない家庭や子どもをもたない選択をする人に後ろめたい雰囲気を与え、見えなくしてしまうと警鐘を鳴らしています。そのうえで

「転入者の増加に力を入れて、転入者の増加に力を入れるだけでなく、町民の声に寄り添い、暮らしに目を向けた施策が求められている」と訴えます。

共産党と町民30年の運動で前進 現町政は「人口維持」目的に転換